



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

5

第102巻 第5号 日本幼稚園協会

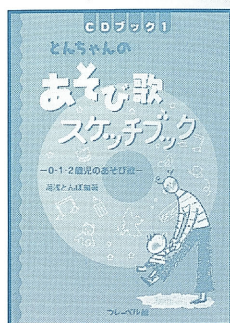
CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック①

とんちゃんのあそび歌スケッチブック

—0・1・2歳児のあそび歌—

好評
発売中!



湯浅とんぼ／編著
B5判 48頁+CD枚
定価：本体2,500円+税

CDブック②

わんちゃんのあそび歌パラダイス

—3・4・5歳児のあそび歌—

好評
発売中!



犬飼聖二／編著
B5判 48頁+CD枚
定価：本体2,500円+税



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

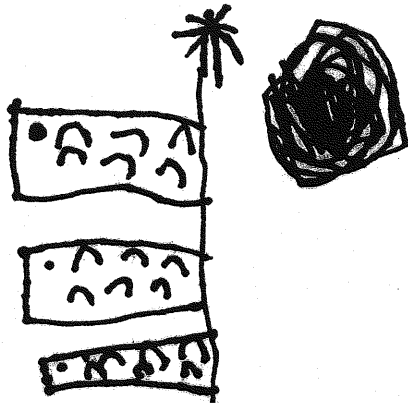
②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第5号



幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇二卷 第五号 —

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 助けよう 孤立する母親たち……………岸井 勇雄……………(4)

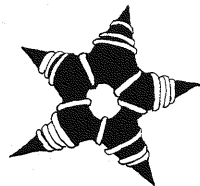
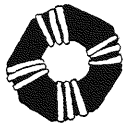
『森の幼稚園』 人と出会う中で考えたこと……………宮里 暁美……………(9)

ある日……………(16)

子どもと出会う(3) 「スキンシップ」考……………岩田 純一……………(18)

せつな系植物楽 植物ぼろぼろ 第一葉 たんぽぽ……………群馬 直美……………(26)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(2) 松葉であそぼう……………浜本 昌宏……………(31)



障碍をもつ幼児の保育(10)―この子と出会ったとき―

言葉のない子のコミュニケーション 津守 真・津守 房江・玉木喜美子… (32)

TO・NI・KARAひろば その七 …… 嶺村 法子… (42)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(6)ブルデュー社会学における支配の社会学 …… 安田 尚… (46)

夏、それぞれの成長―幼いきょうだいで暮らす― …… 藤津 麻里… (59)

表紙絵／南塚 直子

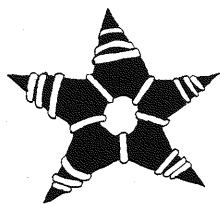
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「手裏剣星」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子



巻頭言

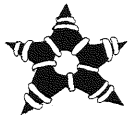
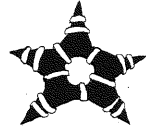
助けよう 孤立する母親たち

岸井 勇雄

子どもを「操作」できないいらだち

ある病院で、怪我をして受診する子どもの数が増えた。ある子どもは何度も同じような傷で連れて来られ、母親は階段から落ちたというのだが、どうもそのような怪我とは思えないので、医師がゆっくり話を聞いて心を開いてもらったところ、私がやりましたとわが子への虐待を打ち明けたという。そこで医師は、これはこの人に限らないと、多くのカルテを点検して疑わしい場合を取り出し、保護者に電話をかけた。





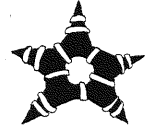
「その後いかがですか。体のことばかりでなく心のことでも親子のことでも、何でも気軽に相談してください」と、いわば幼児虐待一一〇番を開設したところ、次々に告白する親が出た。

医師の指導のもとにこうした母親たちのサークルができ、その場面がテレビで放送されたことがある。顔はモザイクに、声はオクターブを変えてプライバシーが守られていたが、話の内容はきわめて率直に、現代の若い母親の置かれている状況を物語るものだった。

最初に発言した人が「私が子どもにこんなことをしてしまう原因をよく考えてみたら、子どもが生まれる時にマニュアルをもつて来なかったからだ」と気が付いたんです」と言うではないか。私は、なるほど、そういう時代なのだと思う。

いまや私たちは、電化製品やパソコンなど、機械に囲まれて生活している。これらはすべてマニュアル（取り扱い説明書）通りにやらなければ動かない。また、マニュアル通りにすれば必ず操作できるのである。こういう中に生まれた若い母親たちは、わが子を生んで、それをどう扱ったらいいのかわからないのだ。

この発言を受けた人が、「そうでしょ、だから私、本屋さんへ行つて育児書を買ったんです。だけど、書いてある通りにいかないんですよ」と言う。私も類書（最近で

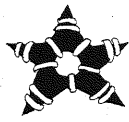
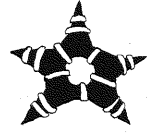


は『子育て小事典―保育のキーワード』(エイデル研究所刊)を書いているので、それはそうだろうと思った。どんなに多くの実例を挙げて、それは一例ずつに過ぎない。そこに書かれている理論と実例を参考にして、自分と子どもとの間で工夫していただかなければ、と。

ところがその人の言うのはもっと極端なのだ。「育児書に、幼い子どもは夜九時には寝かせなさいと書いてあったので、九時まで待って、九時よ、寝なさい、というのに寝ないんですよ。私が、頭へ来て突きとばしてしまっただけです」。

この番組の最後に、心理学者のコメントがあった。それは、この母親たちに共通するのは、幼い時から課題を与えられ、その解き方を教えられ、それに忠実に従って次々と課題をこなしてきた高学歴の専業主婦です、と。自分の子をもって、初めてどうしていいかわからなくなつてパニックを起こしているという分析だった。

幼い時から決められた課題とその解き方を教え込まれ、自分で問題を解決する力が育っていないという指摘は正しい。その上に私は、いまの親たちの子どもと接した体験の不足や欠落が直接の原因だと考える。長い間非常勤で保育原理を教えたある大学で、保育科の学生二五〇人にたずねたところ、幼児と遊んだことのある人一三〇人はまだいいとして、赤ちゃんを抱いたことのある人はわずか五人だった。



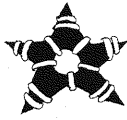
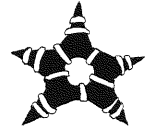
母親を中心にして、みんなで子育てを

参政権も与えられずに差別をされていた昔の女性の方が、法的に同権になった現在の女性よりも恵まれていたという事実がある。

まず大家族で共働き、いわば老若男女共同参画社会だったということである。農家はもとより、家内工業も商店も専業主婦などは存在せず、家族総出で働いていた。隣近所の交流もプライベートがないくらいに盛んで、主婦が身ごもると、お前さんは身重なんだから無理しちゃいけないよと助けられる。出産もみんなの手を借りて済まし、産後の肥立ちが大事だよといったわられながら職場復帰。小さい時から弟妹の世話をし、近所の赤ちやんのお守りもし、子育て中の親子の間柄も見なれている。年寄りからいろいろ教わることもでき、それだけに苦勞な面ももちろんあったが、みんなで子育てをすることができた。

子どもも幸せだった。忙しい大人たちに見守られながら、過保護も過干渉もなく、近隣の子どもたちと遊び回り、幼少年期にふさわしい生活を体験することができた。神社の境内で遊んだ時、自分を含め男の子たちも赤ん坊を背負っていたことを覚えている。

これに比べて、マンションの一室で子どもと向かい合い、社会と断絶したいまの母



親が育児ノイローゼになるのはやむを得ないことかも知れない。特にすべては人工的に操作すべきものという体験ばかり積み重ねてきた現代の親にとつて、いのちあるものを育てることの困難さ、特に予期に反する子どもの反応の複雑さは耐えがたいものがあるに違いない。

「自ら育つものを育てせよとする。それが育ての心である」「教育は育つものに対する信仰である」——これは本誌の編集主幹もなさつた倉橋惣三先生の言葉である。フレibelが言うように「子どもの中に、かすかながら全面的に活動している生命に、全面的に、しかもひそかについていきながら」折りあることにそれを強めていく子育ての喜び。

これを理解するためには心のゆとりが必要である。母親一人に子育ての責任を負わせるのをやめ、家庭も地域も園も一緒になって母親を中心としながらみんなで子育てをし、その苦勞も喜びも分かち合う方向へ進まなければならないと切に思う。

(県立新潟女子短期大学)

『森の幼稚園』

人と出会う中で考えたこと

宮里 暁美

私の勤務する幼稚園では、三年前より幼稚園から歩いて五分のところであり豊かな自然に包まれることができる都立林試の森公園を『森の幼稚園』と呼び、週一回は出かけて自然の中で遊ぶ保育を積み重ねている。

私自身、このように頻繁に園外に出かけ、そこ

を自分たちの居場所と感ずるように過ごした経験は新しく、毎日が発見の連続だった。豊かな自然とのかかわり、幼児の生き生きした姿、保育の工夫など、学んだことは数限りないが（註）、今回は、『森の幼稚園』の実践の中で、様々な人々と出会ったことについてまとめることとする。

柔らかい視線や笑顔に包まれて……

「こんなに大きいダンゴができたよ！」

「よし、もっと大きい作るぞ！」

子どもたちも教師も、歓声を上げて泥ダンゴ作りをしていた時のことだ。散歩していたおばあちゃんが立ち止まってこちらを見ている。視線を感じて顔をあげると、につこり笑いながら「いいこと、いいこと、そうやって遊ぶのが一番ね」と話しかけられた。

森に行くたびにおなじようなことがある。

ポプラの落ち葉が山のようになっている頃、「山だ！海だ！」と大喜びで中に潜り込み全身落ち葉になって遊んでいると、「まあ、気持ちよさそうね」と話しながら通り過ぎたり、『あぶくたった』をしていると「なつかしいわねえ」としばらく様子を見ていたりするおばあちゃんたちも

いた。

『森の幼稚園』という名

の通り、森という場を自分たちの居場所として感じ、のびのびと遊ぶ保育を展開していると、そこに子どもの世界（遊び空間）が出現する。森にはたくさんの方がいるけれど、スポーツや散策中心で、私たちのようにひた

すら遊ぶという姿は目を引くようだった。何より、子どもが無心に遊んでいる姿は、それだけで人の心を和ませるのだろう。

はじめの内、公共の場だということや人の目があるということで、私の心の中には固くなる部分もあったけれど、いろいろな方の温かい視線や言



葉を受け、子どもが子どもらしく伸び伸びと遊ぶ姿がこの森にはふさわしいと気付き、ゆったりと過ごせるようになった。

幼稚園に地域のご老人をお招きして遊ぶ機会をつくることはよく行っているけれど、このようにして、外に出ていくと、その場で多くの方と出会い、うれしい時間を共有できるのだということを実感している。

いつも会う、不思議なおじいちゃん

赤い服を着たおじいちゃん、車いすにのって森を一人で散歩している。子どもたちがいると近づいてくる。いつも葉っぱを手に持って、「ほら、ほら」といいながらその葉を口に



おじいちゃんのをををし
葉、は笛をひく。

くわえて「ピー、ピー」と吹いて聞かせてくれる。「すごい！」と言って近づくと子どもたちを面白がらせるつもりなのか、口にくわえた葉をプツと飛ばして子どもに当てることもあり、その度に子どもたちは、キャー！と大騒ぎする。

しばらく話していると、話のつじつまが少し合わないようにも感じられる、ちよつと不思議なおじいちゃん、道行く人からは、少し遠巻きに見られてしまうようなところもあった。でも、我が園の子どもたちも教師も、そんな風にはおじいちゃんを見なかつた。出会えてうれしい、という気持ちで挨拶し一緒にの時間を過ごした。

おじいちゃんは、楽器も持っていて、それを上手に演奏してくれた。

私もそばに行くと「先生、今の子はどんな歌を歌うんだね」とたずねられる。リクエストにこたえるという訳にはいかないようだけれど、こうし

て先生とも言葉を交わしているようだ、と思うとさらに子どもたちは安心しておじいちゃんの周りを離れなくなる。

三月、もうすぐ一年生になる子どもたちが、森の管理事務所にプレゼントを持って挨拶に言った。

二年間、森でたくさん遊ばせてもらったお礼の気持ちを込めて。その帰り道、咲き始めたカンヒザクラの花に誘われて広場の方に行くと、そこで久しぶりに車いすのおじいちゃんに会うことができた。

「おじいちゃん、元気だった?」「もうすぐ一年生になるんだよ」と話しかける子どもたちに、おじいちゃんは葉っぱを聞かせてくれた。初春のまだ寒さの残る日だったけれど、そこだけは、ほんのりと温かい感じがした。

なつかしいなあ、この木に登ったんだよな

近くの中学校の三年生が家庭科の授業で、保育



実習に来るようになって三年目になる。その保育実習を森で行ったことがある。中学生と森で待ち合わせをして、それぞれ一対一のペアになり遊んだ。幼稚園で一緒に遊ぶ時とはまた違う雰囲気になる。

さっそく幼児を肩車して歩き回ったり、大きな切り株の下を一緒にのぞきこんで虫を探したり、中学生は皆のびのびしているように見えた。

森に来ると必ず登る大きな木がある。その木を見上げて「わあ、なつかしいなあ、この木に登っ

たよなあ」と言う声が聞こえた。

ここにはたくさんさんの思い出があるのだろう。たくさんさんの人に愛されたくさんの人を育ててきた場所が、この森なのだ。

「よし、そこにつかまれよ」「ほら、次はその枝につかまって」と、さつきのお兄さんが一緒に遊んでいた園児を、上手に木に登らせている。自分がかつて登った木に、今、幼稚園の子を登らせている。「いい気持ちだろ！」と木の下で園児を見守りながら話しかけている。遊び心のバトンが、こうして渡されていく。一緒に楽しく遊んだ思いと共に。

ドングリを見つけたらね、上を見てごらん、ドングリのお母さんはどこかな？ ってね

森を頻繁に利用しよう、自然ともっと友達になりたい、そんな思いを抱き、森の管理事務所を訪

れた。幼稚園側の思いを伝えたところ、そこで紹介されたのが田中達男さんだった。数年前まで管理事務所に勤務されていた田中さんは、森のことなら何でも知っている素晴らしい人だった。

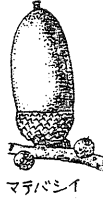
「この木は必ず見て欲しいんだ、レバノンスギと言つてね……」と一本の木にまつわる話を子どもたちに話してくれたこともあった。木についてまるで恋人のように話す人がいると私ははじめて知った。

今ならあの実が落ちていくはずだと、森の中を案内してくださり、ずいぶんたくさんさんの珍しい実を見せてもらった。ドングリにも様々な種類があり、ドングリの帽子の模様もそれぞれ違うということを教えてくれたのも田中さんだった。

森を歩いていると、田中さんは立ち止まったり上を見上げたりとても忙しい。

「おやどうしたの、病気かなあ、これは……」と

ドングリいろいろ (実)



マラバニイ



コナラ



シカシ



クヌキ

林試の森には、まだ「まだ」たくさん種類のドングリが
あります。

考え込む時もある。私から見ればどれも同じような状態としか見えな
いの、枯れかけている木や病気になるにかけている木を見つけて落胆
したり心配したりしている。見えているものが違うのだと思う。

森を愛する田中さんは、『森の幼稚園』の取り組みをとっても喜んで
くれている。子どもたちに、今一番経験させたいことは、自然の中で
ゆつくりとした時間を過ごさせることだという思いを共通にもち実践
を支えてくださっている。

地域の人材活用とか専門家からの知識を得る、などという表現では
足りない何かが田中さんとの出会いの中にある。幼稚園から一歩外に
飛び出し、その場に親しんでいこうとするならば、その場を作りだし
た人や愛している人と出会うことが必要だし、その出会いを大切にす
ることで、経験は飛躍的に豊かになるということが分かった。それ
は、大きな気づきである。

ねえ、ここに来たら、もう森に行っちゃおうよ

追いかけてっことをしていたあずさちゃんたちが裏門のところまで来
た。あれっという顔で「ねえ、ここに来たら、もう森に行っちゃおう

よ」と大きな声で言った。

「え？」と聞き返すと「だって、この門を出たら、もう森だもんね」「ね！」と二人は顔を見合わせて言った。

いくら近いと言っても裏門からは森は見えない。歩いて五分ほどの距離なのである。でも、あずさちゃんたちは、確信をもって「もう森だもんね」と言っている。

この言葉を聞きながら、心理的距離という言葉が浮かんだ。森に行く時には、いつも裏門から出る。繰り返し出かけて楽しい時を過ごす内に、どんな森が身近になっていくのだと思う。門の外に（そこは普通の道路なのだけれど）森の気配を感じているのだろう。

幼稚園の外にとっても居心地のいい場所ができて、子どもたちも私もとても幸せな毎を送って

いる。私たちは、いつも出会いの中に投げ出されている。園の中においても園の外においてもそれは同じ事だろう。出会いの中にたくさんの宝物が隠されている。保育は宝探しのようだ。あせらずゆっくり欲張らず、大切な宝を味わって歩んでいきたい。

（目黒区立ふどう幼稚園）

註 研究紀要 平成14年度目黒区教育委員会教育開発
園 研究主題「自然の中でみずから遊びを創り出す子どもの育成―森の幼稚園の実践から―」 目黒区立ふどう幼稚園



ある日

撮影・平野 清



子どもと出会う(3)

「スキンシップ」考

岩田 純一

知覚のいろいろ

心理学のなかで、人の知覚は古くから中心的な研究領域の一つである。人は異なった感覚受容器をもち、そこからさまざまな情報を得ている。それらの感覚様相は、大きく遠感覚と近感覚とに分類されている。遠感覚とは視覚、聴覚であり、近感覚は触覚、嗅覚、味覚や内臓感覚、運動感覚、平衡感覚といった感覚を指している。ま

た遠感覚は高等感覚、それに対して近感覚は初等感覚ともよばれる。しかし、同じ感覚受容器でありながら、なにゆえ高等や初等として区別されるのであろうか。

遠感覚とは、刺激源が身体から離れたところにあっても、その方向・距離が認知できるものである。したがって、視覚や聴覚といった感覚器官がこれに相当するのである。視覚や聴覚は、自己身体の外部に投影される世界である。そこにみえるものに手を伸ばし、その音源に

耳を傾けられる世界なのである。一方の近感覚とは、刺
激源が身体そのものに近接してしか知覚できない感覚世
界であり、まさに触覚、嗅覚、味覚などといった感覚が
これにあたる。

人にとつては、どの感覚も大切なものである。とりわ
け目と耳から入ってくる感覚情報はより重要なものであ
る。人はその生活の多くを視覚や聴覚情報に頼って生き
ざるをえないからである。近感覚が身体にはりついてい
るがゆえに主観性を強く帯びているのに対して、遠感覚
の情報是对象化され、他者とのあいだで共有し、客観的
に検証することができる知覚世界である。また対象化さ
れた知覚世界はことば（記号）によつて概念化されやす
いのである。したがつて膨大な遠感覚からの情報をこと
ばによつて概念化し、それを相互に伝え合うといったこ
とも可能になつたのである。本を読む、映画をみる、講
演を聴く、音楽を鑑賞するなどといった活動を思い浮か
べればよいだろう。かくのごとく記号的な意味世界に生

きる人間にとつて、とくに視覚や聴覚情報が重要なもの
となり、それゆえ遠感覚が高等感覚ともよばれるのであ
ろう。

しかしながら、みる・きくは本来にそれほど高等な感
覚なのであろうか。たしかに遠感覚の世界は、身体から
離れて客観的に遠い刺激源を定位・認知しうるような印
象を強く帯びている。しかしそれゆえに、逆にどこか自
己にとつては胡散臭さを内包することになるのではなか
らうか。どこかにその遠感覚の世界（情報）に対する信
用のおけなさともいった感じである。そうはいつて
も、日常生活の中ではそのような疑いや、胡散臭さの意
識が前面に出てくることはない。むしろ、いつもは意識
の背後に潜んでおり、あまり疑いをもつことなく、じぶ
んのみえるもの・きこえるものに頼つて行動している。
なぜなら、もしこの感覚の世界に疑いをもちはじめら
ると、その途端にスムーズな生活に支障をきたしてしま
うからである。

近感覚は初等か

病的な強迫神経症という程ではないが、つぎのような経験をなされた方も多いのではないだろうか。私は単身赴任であり、職場の京都と金沢の自宅との往復である。

京都の宿舍を留守にして金沢へ帰るときは、必ず風呂場、ガス栓、台所の水道、火の元を点検して帰ることになる。とくに長い期間、宿舍を空けるときはなおさら念を入れる。しかし点検したつもりが、もしやと不安になって、せっかく出かけた途中でまた戻って確かめるとか、出かけたものの家が気になって仕方がなかった経験は、おそらくどなたでも多かれ少なかれあるのではなからうか。私も、何度も点検しては出かける。しかし、いったん気になってしまえば、出ては戻り、戻っては出ることの繰り返しで、その場所からなかなか離れられなくなってしまう。最後には、どこかでじぶんを納得させなければならぬ。

じぶんでも少し神経症的と思うほどであるが、私流の納得のさせ方を述べておこう。それは、ガス栓が締まっているのを見ても、やはりそれでも最後はコンロの穴にさわってガスが出ていないことを確かめ、ガスの臭いがないかを嗅いで確かめてしまう。風呂場の栓が締まっているのを見ても、押栓が確かに水平になっているのを手で触れて確かめ、さらにバスタブのなかにある暖気口に触れてしまう。エアコンとて同じである。リモコンのスイッチを押して、ファンが閉じているのを見ても、その下にいつて送風が止まっているかどうかを思わず肌でも確かめる。(じぶんでは病的と思いがらも)このような一連の儀式を済ませてから、もしこれでどうにかなくても仕方がないと、自分に納得させて出かけるのである。しかし、どなたも無意識のうちに似たり寄ったりの行動をしているのではないかと思うが。

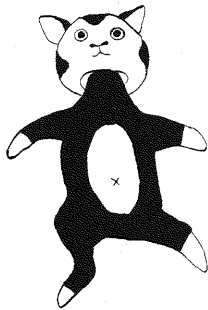
じつは、このような納得のさせ方には、共通する特徴がある。それは、視覚・聴覚といった遠感覚からの情

報、なかでも視覚（みえるもの）だけでは何となく頼りなく、最後には初等と称される、より身体に結びついた近感覚（さわる・かぐ・あじわう）に頼って安心するのである。同じじぶんの感覚ではありながら、そのみえていることやきこえていることには、何とはなく本当にそうなのかと不安が生じてしまうのである。視覚や聴覚の

世界は自己身体の外部に投影される、他者との間で共有し検証し合うことができるが、他方で身体から離れているがゆえに見間違ひ、聞き違ひといったことが起こりうるからである。しかし生身にはりついた自己の主観的な（近感覚の）世界にはそのようなことは起こらない。じぶんの身にはりついた主観的な感覚は、見間違ひ、聞き違ひの生じようがないものである。したがって最後にはじぶんの身体に密着するきわめて主観的な近感覚の世界に戻って確認するのである。このような私のエピソードをもち出さなくとも、同じような感じ方は、日常的な表現のなかにもみることができ。目前の見聞きしている

ことが信じがたく、思わず「ホッペをつねってみる」「我が目や耳を疑う」といった表現のなかにもうかがえるだろう。そのような感じ方が極端になると、不潔神経症のように、汚れが目にはみえないにもかかわらず、手の皮がすりむけるほど繰り返して手を洗わないと気が済まないということになるのである。

対人的な関係のなかにおいてもそうである。仲間と約束を交わすとき、「指きりげんまん嘘ついたら針千本飲ます」という文句がある。それはまさに、最後にはもつとも身体にはりついた近感覚をよりどころにしているのである。昔は、相手のことば（口約束）だけでは信用できず、それを書状として書き、最後にはじぶんたちの指先を切って血判を押し合うといった、きわめて身体的な痛み



よって納得させたのである。判子の朱印も、もとはそのようなところに源があるのではなからうかと想像してみよう。これらはいずれも、じぶんの生身の世界から離れてみえるものや、きこえることだけではどこかで懷疑的であり、最後にはやはりじぶんの主観的な生身で実感しないと安心できないのではなからうか。そのように考えると、近感覚こそ自己の確かな存在を実感させる感覚なのではないかと思われる。

根源的な感覚として

このようにみると、視覚・聴覚は高等で、それ以外の近感覚は初等なのであろうか。人にとって遠感覚が近感覚よりも優位で大切だと言われるが、生まれたときからそうなのであろうか。そこで発達の観点に立つて、これらの感覚がもつ意味について考えてみたいと思う。

最近の赤ちゃん研究によると、誕生早くにも遠・近の感覚は機能し始めるようである。しかしながら、赤ちゃん

んにとって大切なのは、われわれのような遠感覚ではなく、むしろ近感覚が重要な役割を果たしているようである。赤ん坊の生存には養育者（母親）が欠くべからざる役割を果たすことは言うまでもない。さもなければ、ひとりで歩くことも、食べ物を摂取することもできない無力な赤ちゃんの生存はありえないからである。その際、そのような母子の緊密な結びつきには近感覚が中心的な役割を果たしているのである。母親の胸に抱かれ、母親の姿勢と一体化して動く、乳房から母乳を吸う、母親の匂いをかぐなど、といった身体に密着した近感覚を中心として母子の共生的な関係が展開するからである。さわる、かぐ、あじわうといった近感覚の受容器が主導的なチャンネルとなるのである。たしかに母親は抱いた赤ちゃんにやさしく語りかける。しかし、この母親の声も赤ちゃんにとっては遠感覚の刺激というより、むしろ身体に響く近感覚に近いものではなからうか。

このように考えると、赤ちゃんにとっては、遠感覚よ

りむしろ近感覚が、じぶんの存在を支えるうえで中心となる感覚であり、初期のモノや人との関係を取り結ぶ根源的な感覚とでも言えるのではなからうか。この根源的な感覚こそ、最初に出会う人との情動的な交流や信頼的な関係を形成していくのに欠くべからざるチャンネルとなるのである。このようにながめると、初等と呼ばれる感覚こそが愛着関係や自己感覚をつくりあげていく際の根底にあることがわかるであろう。その意味では決して劣った感覚としての初等ではなく、人にとって根源的な感覚として位置づけられるように思える。

遠感覚の世界へ

幼い子どもが怖い経験をしたときなど、「だいじょうぶよ」「だいじょうぶよここにいるから」と声をかけるよりも、母親が抱きしめてやる方が子どもは安心する。情緒的に混乱したときなども、ことばでなだめるよりも、むしろ抱きしめるといった身体的な接触の方が有効であ

る。このことは、子育てのなかでしばしば体験することである。したがって初期の母子関係では身体的な生身の接触が重要な意味をもつのである。

しかし発達にともなって主導的な感覚が、近感覚から遠感覚へとしだいに移行してくる。子どもにとって、みる・きくという活動が事物の認識や対人関係において主要な役割を果たすようになってくる。近感覚から遠感覚の世界、みる・きくといった身体から離れた遠感覚の働きによって外界が認識の対象とされ、対人関係においても視覚・聴覚を中心として展開されるようになってくるのである。たとえば、子どもは母親にしっかりと抱きしめられなくとも、向き合った母親の姿をみるだけで安心するとか、「だいじょうぶよ、ここにいるから」といった母親のやさしい声をきくだけで心理的な拠り所とできるようになってくる。まさに母子のかかわりが、さわる・かぐという密着した関係から、みる・きくといった距離化された遠感覚の世界にもとづくようになってくる

のである。そのうち、目前に母親の姿や声がなくとも、母親の姿を思い浮かべ、母親の声を思い起こすだけで、じぶんの心理的な拠り所としうるようにもなつてもく。それによつてそれまでの心身一体的・共生的であつた母親からの心理的な自立（距離化）も可能になつていくのである。まさに自我が芽生える三歳も近くには、このような形での子の分離が可能になり、子どもの心理的な自立（心理的離乳）が始まるのである。

このような遠感覚の世界への移行は、ことばという記号を手に入れることによつて、さらに促されていくことになるように思われる。みる・きく世界はことばによつて概念化され、それが外界の意味世界をつくつていくのである。それにともなつて、近感覚の世界は二次的なものとして背後におしやられてしまうことになる。

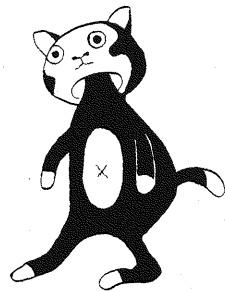
スキンシップということ

以上のように考えると、そもそも自己が成り立つ根源

となる感覚は、初等とよばれる近感覚なのである。この生身と結びついた近感覚こそが、他との関係を取り結び、自己形成の最初の

基盤となるものである。じつは、その基盤の上に、ことばが飛び交い、視覚を介した、みる・きくというわれわれの世界が成り立つてくるのである。しかし、その一方においては、この世界がじぶんの直接的な身体性から離れていくということでもある。だからこそ、やはり最後には手に触り、鼻で嗅いでみるという身体にはりついた主観の世界に戻つて確かさを実感することになるのである。このことはわれわれとて同じであり、人は不安になると、絶えずそこに還つていこうとするのである。

不幸にして、初期の母子関係において、そのような近感覚に基づく一体的な関係が十分には形成されなかつた



とき、それが後の育ちにおいてさまざまな問題（自閉的な症状やことばの遅れなど）を生じさせる。これは発達臨床の場面においてもしばしば指摘されてきたことである。その際、初期の母子関係をやり直すという臨床的な指導方法がしばしばとられる。おんぶ、だっこ、添い

寝、イナイナイバー、追いかけてこなど、ぴったり人にくっついて安心する体験、身体的接触をともなった母親との楽しいかかわり体験をもたせるといったものである。いわゆる近感覚の世界を中心としたやりとりによって、それまで不足していた身体接触がとられるのである。そのような取り組みのなかで、しだいに子どもの方も母親に身体的な接触を求める行動（いわゆるべったりと甘えるといった愛着）をみせ始め、そのなかでしだいにことばでのやりとりも出現するようになってくる、といった変化がみられるようになるという。子どもとの関係ができてくると、その兆候として近感覚にもとづく身体的な接触が出現し始めるのである。甘えのやり直し

行動なのである。このようにみると、（愛着や信頼性といった）対人的な関係性は、まずは身体的な水準から始まり、そこに原点があるように思われる。そのような基盤があつて、その上に遠感覚によつた対人的な関係性が成り立ってくるのである。

幼い子どもにとっては、とくに近感覚を中心としたかわりが初期の発達にとつて重要な意味をもつのである。和製英語ではあるがスキンシップという俗語がある。これは互いに直接触れ合う、肌と肌の接触（タッチング）が、初期の母子関係の形成、ひいては乳幼児の情動や社会性の発達にとつて重要であると言われてきた。そのようなスキンシップの意味も、このような近感覚・遠感覚の発達とその機能という観点から捉え直してみると、今までとは異なつた新たな意味合いをもつてくるように思われる。

（京都教育大学）

せつな系植物染
植物ほろほろ



絵・文 群馬直美

オニ葉 たんぽぽ

「タンポポ戦争」というのがある。図鑑で読んだ。

そもそも日本に野生していたのは、十種のタンポポ。その彼らが、海外からやってきたセイヨウタンポポなどの繁殖に追いやられ、だんだん息を潜めてきている。この様子を、人間の世界になぞらえて「タンポポ戦争」と呼んだのだ。

ゴルフ場のキャディーさんたちも「タンポポ戦争」をしているのだそうだ。……ふわふわ跳ぶ綿毛。ゴルフ場の広い敷地に、どこからともなくどんどん舞い降りてきてしまう。だから、キャディーさんたちは、タンポポを見つけると根こそぎむしりとるのだという。でも、むしってもむしっても、どんどん生えてくる。繁殖力が強いタ

ンポポとキャディーさんたちの戦いは終わることがない。

私の「タンポポ戦争」。……別な人を母親とカンチガイ。

共働きの父と母、住み込みのお手伝いさんに兄と私の世話を任せて働いた。もの心つく前の私、てっきりこのお手伝いさんを母親と思ってしまったのだ。その人が突然いなくなつた。「お母さんがいない」と泣きじゃくる私。涙の向こうから、それはそれは真剣な母の顔が近づいてきて、言った。

「私がホントのお母さんだよ」

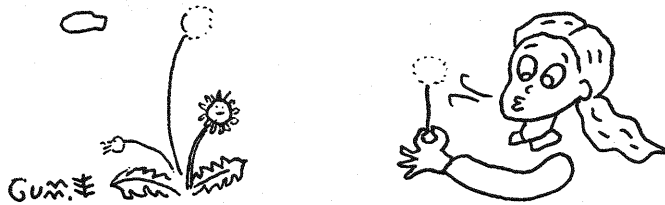
父も言った。

「タンポポの綿毛が耳に入つて、耳が聞こえなくなつてしまったんだよ」

タンポポお母さんが消えた日、私の「タンポポ戦争」が始まった。

春の野原や道端でタンポポを見かけると、耳を押さえて走つて逃げた。そよ風に運ばれてタンポポの綿毛が空を舞う。両耳をしつかり手で押さえながら、タンポポお母さんの

ヨーロッパでは
タンポポの
綿毛は
赤心占いた
使われる。
ひと吹きで
全部
吹き飛ばせたら
恋は叶う。
やってみた。
ビクともしない
綿毛に
ビククリ！





面影を追う。あの人はどこへ行ってしまったんだろう……。同時にあの日の母の顔も、ふわふわ、ふわふわ、運ばれ出て……ふわふわ、ふわふわ、漂うふたつの面影。

通りですれ違った年配の女性。「あつ、タンポポお母さん！」の面影を見て、振り返る。実の母に悪いと思う。タンポポは地中深くまで根をはる。心深くまで根をはってしまつた面影に、途惑う。

父も母も、あの日のことを私が憶えているとは、思つてはいない。だから私も、なにもききはしない。

ただ一度、中学生になつたとき、その人が逢いたがついてると母に連れられ、祖母の家に行つた。そのときの母の神妙な面持ち。まるで我が子を奪われてしまうかのような。母は知つている！私がその人に思慕の情を抱き続けていることを……。それから何回も春が来て、タンポポの綿毛と一緒に、この想いを少しずつ風に運ばせた。

私は大人になつた。葉っぱの絵を描いている。

早春のフランスはノルマンディー。牧歌的な風景の中、ピヨピヨ小鳥がさえずり、遠くで牛が草を食む。日本で見かける牛と違って茶色くて毛むくじやら。ふと足元に目をやると、タンポポ！ こんなところにも、タンポポお母さんが！とおもわず葉っぱを一枚戴く。日本で見ると同じだ。タンポポの花は、朝になると開いて日が沈むと閉じる。西洋では、「牧童の時計」と呼ばれているのだそうだ。もうしばらくしたら、この広いノルマンディーの空の下、タンポポの綿毛が飛ぶだろう……。

真冬、アトリエ階下の自転車置場。たくさんのイカの頭で出来たようなギザギザ葉っぱ。タンポポだ！ いつも見ているはずなのに、気づかなかった。常緑樹の肉厚な葉と違い、押し葉にしたらべらべらになってしまふ、か弱く繊細なタンポポの葉。そんなタンポポがこの寒さの中、「希望の春は、いつだってある」と言わんばかりに、堂々と緑！ 身を挺して、冷たい地面を暖めてくれている。さすが、タンポポお母さん。母は強いぞ！



タンポポお母さんが消えて、四十回目の春が来た。道端でタンポポの綿毛と出会っても、もう耳を押さえたりはしない。だけどやっぱり、ふわふわとあの面影、ふたつ……。

ふわりふわりと四十年、漂い続けたタンポポの綿毛。思い掛けず舞い降りた。出版社に連絡があったのだ、タンポポお母さんから。すぐ近くに住んでいた。

どきどきしながら、小さな駅の改札口で待った。雨が降っていた。

八十歳だというその人は、改札口に続く階段を上ることが出来るのだろうか……。ふわりと現われたその人は、ちいさなちいさな人だった。身の丈、私の半分くらい。歳をとっても白髪にならない家系なのだ、見事に黒い髪の毛。老いてなお一人暮らしの寂しさも感じさせない、明るく希望

に満ちた瞳。タンポポのような人。

そして私は知った。乳飲み子の私を出勤前の母が、いかに甲斐甲斐しく世話をして、その人に毎日ゆだねていったかを。ああ、私は、タンポポお母さんの暖かさ、ずっと一緒にいたんだ！

青空を舞うタンポポの綿毛を見ながら、バカみたいに大きくなった私を見上げながら、その人は言った。

「どんな大人になったのかと思って……」

この地球上に、約四百種のタンポポがある。主に北半球の日当たりのよい野原や道端に、彼女らはいらる。日本にもおよそ二十二種のタンポポが生きている。そして……。私の心の陽だまりにも、ふたりのタンポポお母さん。

(葉画家)

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(2)

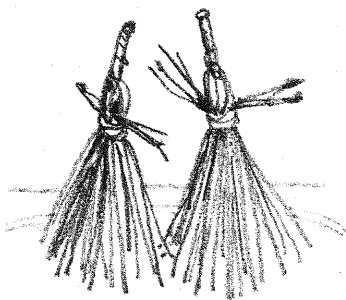
浜本昌宏

松葉であそぼう

パタパタと玄関に駆け込む音。「おじちゃん、遊びをおしえて」と元気のよい孫達の声が飛び込んできました。

庭に松の樹があったことから、庭に出て、松の枝の先を折り、輪ゴムで束ね、裾の方をハサミで平らにし、腕の部分として葉を横に挿しこみ、図のような力士を一緒につくりました。

土俵は、紙箱の蓋を裏返して、その上に円形を描いたものです。



さあ、始まりはじまり。

テレビで連日の大相撲を見ていることから、イメージは充分です。「ヒガーシ……」「ニイーシ……」の呼び声から、「はっけよい」「はっけよい」。

土俵を指でたたいて、その振動で松葉の力士は動きま

す。

孫達はトントントン「あつ、やられた」。「もう一回」と夢中で勝負に挑みます。倒されないように足を広げたり、角度をつける等の、工夫がみられ、ひとしきり遊びに興じました。そのうち、土俵上でくるくる回る姿から、これはダンスだね、ということになり、つぎは、手と手をつないだ一組のペアが華麗に舞うダンス大会に変更。

これも、遊び終わったら、松葉を引つ掛けあつてのひっぱりっこ。色艶よく、丈夫そうな形の葉を選んで、さあ、勝負、勝負。(元・三重大学)





障害をもつ幼児の保育(10)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

ゲスト・玉木喜美子 (T)

言葉のない子の「コミュニケーション」

毎朝意気込みをもって学校に来る

M：今日は、愛育養護学校で長年保育をしておられるT先生に来て頂きました。ちょうど今手を使うことの話

しているところです。指さしは決して自閉症の特徴ではないということをごで話をしました。指さしをする前に子どもは大人のそばに近寄ってきます。それは何か話をしたかと思ってるんじゃないかと私は思ってるんで

す。今日話に出るS子さんは毎朝登校すると、待ちかねたように隣の幼稚園に行きます。

この日もいつものように幼稚園に行ったとき、その日がいよいよ劇の最終の稽古の日で、子どもたちは舞台の上に乗ってやっていたんです。

F 衣装も着けて？

M ええ、衣装も着けて。S子さんは、僕の膝の上に乗って三十分くらいじーっと動かずに見てるんです。いつもだったら少しするとあっちの部屋、こっちの部屋へと動くんだけど、こんなにゆっくりと僕の膝の上に乗って見てるってことにね、僕は非常に驚いたんです。

S子さんは演出家

M そして昼過ぎに学校に帰ってきたら、しばらくしたらS子さんが学校の大人をつかまえて、劇遊びをやっているんです。

T それは、白雪姫をやっていたんです。

その日は誰が白雪姫をやっていたかしら。

M S子さん自身じゃない？

T S子さんはね、もうこの頃白雪姫の衣装を着ないんです。演出家に徹してるんです。

M 私が見たときにはリンゴを実習生のYさんに食べさせていた。

T じゃあやっぱりYさんが白雪姫だったんですね。その日の出来事っていう風に限定はできないんですけど、その頃S子さんがよくやっていた遊びは白雪姫で、だれかを白雪姫に見立てて彼女がリンゴを差し出すんですね。白雪姫がそれを一口ばかりと食べるとウツとのどに詰まらせて倒れる。そうして他の大人や子どもを集めてきて、その倒れて息が出来なくなった白雪姫の周りに集まって、おいおいと声を上げて泣くんです。S子さんは周りの人がおいおいと泣き悲しんでいる様子をすごくよく見ていて、その場面を何度も何度もやり直させるんです。私たちは白雪姫のストーリーを知っているだけに次

の展開をしなくなつて、倒れた白雪姫のほつぺたにキスをして白雪姫が目覚めるつていう所に行きたがるんだけど、S子さんはまたその復活した白雪姫の口にリンゴを食べさせて。

F 面白いですね。

T 小人たちが白雪姫の死を悲しんで泣くつていうところを、何度も何度もやるんですよ。

F そういう演出家としては、この人は言葉なしでどういふ風に指示するわけ？

T ええとね、最初に泣けつていふ風にはいわなかつたと思ふんです。ちよつと離れた所にそばにいて立つていてちよつとこう口元にね、笑いを浮かべながら見てるつていふ風ですね。

M 僕は幼稚園から帰つたばかりで弁当を食べようと思つてたら、S子さんが僕の手をぐいぐい引つ張つて三角の帽子をかぶせて小人にさせるわけ、そしてその実習生さんの倒れてるところに連れてつてここで泣けつてい

うのね。ただ泣いたんじゃダメでね、実習生さんの上にこうかがみこんでね、そして泣けつて、もつと泣けつて。

T そうですね。実習生さんが女性のスタッフだったので、津守先生がねちよつとためらつてるんです。私たちは実習生さんの体をこう揺すりながら倒れた白雪姫を揺すりながらおいおいと声を上げて泣くんですけど、津守先生はやつぱり相手が女性なので触れるのをためらつてたらね、その手をぐつとこう実習生さんの背中の所にまで持つてきて、こうさすつて泣けつていふことを求めましたね、あの時は。

かならず伝わるという信頼

M それで僕もね、ああと思つたんです。ああこの人は白雪姫をやりながら、泣く場面を、特別に強くやつてんだつてことがそのころになつて初めて分かつた。

F もう初めから白雪姫だつてことは分かつたの？

T えつとね、一番最初はリングですね、プラスチックのリングを食べさせるっていう場面から始まったんです。だから白雪姫っていう設定から始まったのではなく、そのオモチャのリングを口にして、相手のスタツフがウツとこう倒れるというところから発展していった遊びだったんですね。S子さんはビデオをよく見ているお子さんなので、白雪姫の話は下敷きとしてはあったと思うんです。

M 実習生さんと僕の他にもいろんな人を、引っ張ってきてね。

T 主に白雪姫になるのは若い男性のスタツフで。他のスタツフは大体小人役で、劇遊びが発展するようになって少し小道具を買ったんですね。帽子を買ったりとか。それで少しふくらんだんですね。ただS子さんの一番の関心事は、その中でもやっぱりこう倒れた白雪姫の周りで悲しんで泣くっていうところが一番のポイントなんだと思うんです。

身近な人の死と赤ちゃんの誕生

T その劇遊びを始めた時に、S子さんの様子を見ていた別のスタツフがね、二年くらい前に亡くなられたおじいちゃんやまの死と重なって見えるっていう風な印象を持ちました。私自身はあんまりそういう風に重ねては見なかったんですけどもS子さんの遊びを見ているととても生きることと死ぬことをテーマにしている遊びが多いように思うんですね。お母様が出産される時にはまだお腹に赤ちゃんがいた時だったんですけども、砂場にこう大きな穴を掘って自分がそこに頭から入って丸くなってみたりとか、それをその日始めてきた実習生が見ていて「なんだか胎児のようだね」って言って、初めての人にもそういう伝わり方をしたっていうのがとて



も印象深かったですね。それからあの人の好きな遊びの中で、昆虫を選んでそれを丹念に見て、青虫なんかを蟻の巣の中に落としてみて蟻が群がる姿を見てたりとか、すごくそういうテーマが多い人だということとは感じますね。

M そもそも僕とS子さんとの出会いもその関連だということになって分かりました。僕がS子さんとはとんどつき合もない時に、そつと来て僕の後ろから手を触つたことからS子さんとのつき合いが始まって、それからもう一年以上になりますね。

T やはりおじいさまが亡くなられた後でしたよね。

M そうです。

F 死ぬ場面っていうのはS子さんにとって、体を揺さぶったり周りの人が泣いたり大騒ぎするっていう、そういうことなのかしら。

T うーん。その大騒ぎっていうより、もつとこう深いかなしみっていうか、そういう思いをあの人が再現させ

てるっていう風に私はとらえていますけれど、その形のことじゃなくて思いの部分でそういう劇遊びの形を取って追体験しているような印象を持ちます。

分かってもらえなくても努力する

M その劇遊びをやったその日の前の時間に幼稚園に行つた時に、欠席の子どものロッカーを見てこの子が欠席なんだよって、鞆がないからすぐ分かるからそうやって僕に知らせてくれるっていうことがありましたね。その前の日も更にその前の日もそれはあつただけで、その日はね、Sさんがさわっていた一つのロッカーに鞆がかかっていた。だから僕はそのロッカーの子どもは欠席じゃないと思つた。それでもね、Sさんはどうしてもその子のところをね、ドンドンたいて僕に何か知らせようとするとするのね。あんまり大きな声を出すので、他の子どもたちが「あ、その子、鞆があるけどね、欠席なんだよ」って教えてくれた。鞆がおいてあつてもその子は

欠席でね、先生がね「そのお子さんは、午後になって来るかもしれないんです」で私に教えてくれた。そういう細かいことをね、S子さんは分かっているのね。分らないのは僕だけ。そういう場面というのが他にもきつとあるんじゃないかということを、僕はこの日はとつても思っただんです。

死と欠席—不在のイメージ

F じゃあ、死つていうのは欠席みたいなものなのかしら。

M 欠席というのは死みたいなのなのね。

T いないっていうことだね。

F その場にいないっていうことは。

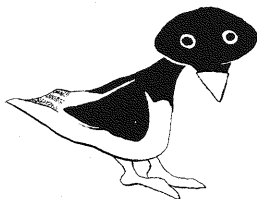
T おじいちゃまが亡くなった時の思い出みたいなものは、なかなかその当時のS子さんの様子からだとか察せられない感じでしたね。だから今のその白雪姫の遊びがそのことと本当に直接結びつくことかどうかっていうこと

は分からないけれども、本当にそういう意味ではS子さんは「悲しい」とか「どうしておじいさん、いなくなつた」っていうことを、言葉で表現したわけではない。家庭からもそういうような説明はなかつたんですけれども、そういう遊びの中で、S子さんが心の中に持っていたことを表現出来る機会になっているのではないかと思えますね。本当にそういう意味ではS子さんはとても表現する力の旺盛な人なんです。

M その大きな声を出したりドンドンたたいたりするのは、知らない人から見たら変な事してるとしか見えないかもしれないけど、そうじゃないっていうことはね、ここまで話してくるとよく分かりますね。

F そして隣の幼稚園の子どもたちがそれをある意味では理解してくる。

M 僕よりずっと早くに分かつ



ている。

理解されない時には

ドンドンたたいたり大声になる

T そうですね。そういう意味ではS子さんは他の人に対してとても信頼の気持ちを見せていて、自分の理解者になつてもらえるつていう、自信を幼稚園の中で育ててきたと思います。

M 今のロッカーの場面でも、みんなが分かつたらもうそれでピタツと大声も出さない。

T 本当にね、時々S子さんと一緒に行く私は、クラスの一ひとりひとりのことは分からないけれども、S子さんは皆のことを把握しているんですよ。いつの間にか。

M S子さんが劇遊びで何かを言おうとしてるつていうようなことは、今の白雪姫の劇遊びの他にもあるんですか。

T 劇遊びについてはもう今はこれですね。こちらの思

惑としてはS子さんにも劇の登場人物になつて、劇のなかの人物になる楽しさを体験してほしいつていう気持ちがあつたんですけど、どういうわけか今はもう徹底して演出家なんです。人を呼んできて役をあてがつて自分はそれを離れたところから見ている。だから全体を把握しているという役取りをして、コーディネートの役を今はしているんですよ。衣装を着てみないつて誘つても、今は絶対それは拒否するし。だから幼稚園に行つても全体を把握するという今のS子さんと共通するものがありますよね。

F 演出家になるつていうのはどういう意味があるのかしら。

T どういう意味があるんでしょうね。

F 物語の中の一登場人物ではなくて。

T そうなんです。

F だから時間的に言えばもう過去のことを、離れた距離から見ると、全体を見るつてことは未来じゃなくて過去

のことは見ることで出来るのかしら。

M 人によってはそういう演出家になりたいと思う人もあり、人によってはそれじゃダメでその中の一員の俳優になりたいと思う者もあり、人によってそれぞれなんでしょうね。

子どもの悲しみ

F S子さんは泣きますか？

T 減多に泣かないですね。怒り泣きはありますけれども悲しくて泣くっていうことはいないですね。

F 怒るっていうことはどの子も出来るじゃない？ 怒ることは割にやりやすいんだけど、悲しむってことは難しいことなのかしら。

T M先生はS子さんが泣いているのを見たことがありますか、S子さんが悲しくて泣いているのを。

M 僕はあんまりそういう場面、S子さんについて見たことはない。

F 怒ることと悲しむことは違うことなのよね。悲しむっていうのは自分の中に深く深くそのことが入ってくわけじゃない？ そして怒るっていうのは外の人をダメだつて叱ったり怒ったりする事だから、悲しむことの方がもつと辛いことよね。

T そうですね、そういう話、学校のミーティングでも話題になったことがあります。怒り泣きはありますけど本当にこう何かさめざめと泣くとか、しくしく泣くみたいな場面はないですね。ただ今の生活のありようとか、S子さん自身がとても理不尽に思っていることとか、なかなか家庭の中でも分かってもらえないこととか、どんなに悲しいだろうってこちらは推測するようなことはいっぱいありますよね。でもやっぱりS子さんの様子を見ると、地団駄ふんで怒って泣くみたいな表現はありますけど、悲しむとかっていうのは今のところないですね。

T どちらもそれぞれね、色んな人がいると思う。どっ

ちが得意かっという言葉は当たらないけど。こっちは出来るけどもこっちは出来ない、こっちはするけどこっちはしないっていうようなね、大人はそれぞれみんなあるんじゃないかしら。演出家つてのは今のS子さん見てると、ああこういう人なんじゃないかなと思いますね。

S さんが例えば幼稚園に行った時に舞台を見る時でも、あの人はね裏側も見ようとするんですよ。舞台の裏側。人形劇の人たちがボランテシアで来てくれた時も、表の楽しさの他に裏はどうなってるかっというのを必ずあの人は見ようとするんですね。そういう視点がすごくS子さんらしいなと私は思っています。だから事の全容がどうなっているかっということをあの人は知りたくてたまらない。表だけじゃなくって裏ではどういう風に人が動くのかとか、どういう仕組みになっているのかっということ、その全体はどうなってるかっということを知ろうとしているように見えるんですね。そういうような自分を取り巻く事柄の把握をしようとしているように見

えるんですね。

子どもは全容を見る、

大人は一部で分かったと思う

F 子どももっというのには言葉があるとかないとかっというそういうことを取り払って考えて、全容を見たいと思うのかしら。部分じゃなくて全部知りたいという気持ちがあるのかしら。

T お子さんによつてもね、本当にこう極端に正面だけ見てる人もいますよね。けれどもSさんはそうじゃないんですね。裏側も見たい人もいますね。

M うん、うん、前に話した子どもにもそういう人がありましたね。

T 疑い深さって言ったら変な言い方だけでも、人を疑ってかかっている子もいましたね。

F ええ、ええ、大人の本心はどこにあるのかっという。

T 本心はどこにあるのかってね。S さんが裏側を見ようとするのはそういうのとも違う感触なんですよ。そこを言葉にして考えたことはまだないんですけどね。この演出家、もうちよっと早い時期には白雪姫の衣装をまとうて自分がお姫様になることをやってた時期もあるんですよ。だけど今どうして彼女が演出家の立場に徹したかと思ってるのか、その気持ちももう一つ私には理解出来ないところがあって、まだその様子を見てるという段階なんです。ただ幼稚園でのいかたとか、幼稚園でのS さんの立場とか、そういうものと重なるものもあるのかもしれない。あの人の世界の捉え方みたいなのが、いま一つ考えきれないところなんです。

M 大人っていうのは、見えたところで一面的に見てそれで結論を出してしまうっていうね、そういうのが大人の習癖ではないだろうか。そうすると子どももっていうのは大人が普通に考えてるよりもっと多くのことを分かっていると僕は思うんです。それは愛育の子どもたちに

ついても全くそうで、大人はちよっと見てこの子はこれが分かるとか分からないとか、それで済ませてしまうけれども、そうじゃなくてどの子どものこと考えても大体において我々が分かっていること以上に、全体のことをね、あるいは全体の一番大事なところを分かっている場合が多いような気がする。そのズレっていうのがね、特に障碍をもった人たちが世の中から理解されない部分になってるんじゃないかしら。

T S さんは探求型の人ですよ。それがとっても面白いんです。あの人のそばにいて。
(以下次号)



その七



嶺村法子

私の勤務地である中央区は、日本橋地区・京橋地区・月島地区の三つの地域に分かれており、全部で十四の幼稚園があります。私たち幼稚園教諭は、平成十三年度より区の職員になったこともあり、特に希望しない限り、区内の三地域を異動しています。

同じ区立幼稚園とはいえ、地域ごとの特徴も異なり、異動は、それまで当たり前と思って行ってきたことを問い直したり、新しいメンバーで新たな試みをしたりできるチャンスでもあります。

また、前任園との交流で、勝手知ったる実家に帰るような気分が味わえるのも、異動があるおかげだと思えます。そして、最大の楽しみは、かつて担任した子どもたちの成長した姿が見られることです。幼稚園と小学校が併設されており、三歳児から六年生までの九年間を同じ校・園舎で過ごすため、異動後六年が経った今も、前任園に行くと三歳時に担任した子どもたちに会うことができます。

五月の徒歩遠足で

隅田川テラスを通り

佃大橋を渡って

前任園の明石幼稚園を訪ねた

園庭でドッジボールをしていたら

屋上から私を呼ぶ声

見上げると

→→→→→ TOMIKARA ひろば ←←←←←

フェンスごしに懐かしい顔がのぞいている

「降りておいでよ」

駆け降りてきたさとしくんが

「まだッみねむら救急車”やってくるの?”

と聞いてきた

「えっ?」

不意をつかれた私は

一瞬にして

あの頃へとタイムトリップ

四歳児うさぎ組

新入園児五人の中に君がいた

君は本当にユニークで楽しくて

でもハチャメチャなことばかりして

私を困らせた

当時の私は

君からのメッセージを受け止めきれなくて

「あー、また!」

と しめつ面

いつしか君は私から離れ

遠くの砂場で遊んでいたっけ

その君とのかかわりの変容を

私は省察し

区の研究奨励園として発表した

そのときの笑顔のままに

君は四年生になっていた

「みねむら救急車”が通りまーす」

転んで怪我をしたり

友達とぶつかって泣いたりしている子を

私はよく背中におぶって

「ビーポービーポー」

といいながら歩いた

体をくねらせて嫌がっている子も

◆◆◆◆ TO MI KARA ひとば ◆◆◆◆

保育室に入る頃には

大勢の

ちよつとوراやましそうな野次馬に囲まれ

笑顔になる

照れて嫌がる

君をおぶって歩いたこともあつたっけ

もつともつと

心を砕いて

準備をして

力を入れてやったこともあるはずなのに

何気なく

本当に何気なくしていたことが

何年も経って再会したときに

一番に君の口から出てくるなんて

それほどあざやかに

君の心に残っていたなんて

保育の仕事が続けているものに与えられる
幸せなプレゼント…

幼稚園の子どもたちに混じって

ようたろうくんや、さきちゃんや

ゆうかちゃんも

ドッジボールの仲間になり

四年生対五歳児のゲームが始まる

わざと当てられて倒れ込むパフォーマンス

思い切り投げるポーズをしながら

ふんわりと投げるやさしいボール

そのひとつひとつのしぐさが

大切に育てらせてきた年月を物語る

やがてチャイムが鳴って

教室に帰っていく君たちを見送りながら

私の心の中にも

トミカラひろば



◀明石幼稚園めざして隅田川テラスを歩く。
春の陽差しが気持ちいい。

さわやかな五月の風が吹き抜けていく

幸せな幼児期の記憶は、心の奥底にしつかりと流れ続け、その人の人生を支える力になる。けれども、そこにかかわる保育者の存在自体は、おぼろげには覚えていても、そう頻繁に意識に上ることはないだろう。

目にも見えず、形もなさず、けれども確かにあったかい、一陣の風のような存在でありたいと、この仕事を続けてきた。

一方で、いらだった気持ちから出たひとことや、棘のある視線で幼い心を傷つけてしまったことを詫びたことも多々あった。

子どもたちのたくましく伸びていく力に感謝しつつ、人生の初期に出会う大人として、日々の生活の中で保育の心を実現させていきたい。

(中央区立月島第一幼稚園)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(6)ブルデュー社会学における支配の社会学

安田 尚

いよいよ本連載も最終回を迎えた。このいささか込み入った解説作業に、しばらくの間とはいえお付き合いいただいた方々には、感謝申し上げます。

さて、今回は「第八章 支配の様式」と「第九章 主観的なものの客観性」を読んでみることにしよう。第八章は、支配に関するマルクスとウェーバーの理論を止揚するという画期的な試み、すなわち物的・経済的支配と

象徴的支配の総合がなされている。さらに、第九章では主観的要素（象徴効果、認知行為、分類行為など）が客観的な社会構造に対象化、客体化されていることが解明されている。そしてそのことによって、社会構造の変革の可能性も語られる。

人間の行為とは、

「実践のエコノミー」の追求である

まず第八章の冒頭では、人間の行為とは究極的には何なのかが述べられている。「狭い意味での経済的实践は、実践のエコノミーという一般理論の特殊ケースである」

(二〇三頁)。つまり、すべての人間の行為は「実践のエコノミー」の追求であり、「狭い意味での経済的实践」(＝財貨の生産、流通、消費の実践、いわゆる経済行為)は、「実践のエコノミー」の特殊ケースにすぎないというのである。

また逆に、「エコノミー」の追求とは縁がないように見える行為も、実は「実践のエコノミー」を追求しているのである。すなわち「実践が、(狭い意味での)『経済的』利害の論理を免れ、『前資本主義』社会や資本主義社会の文化領域に見られるように、非物質的で数量化したい賭け金に向かうがゆえに、利害に^{デザインケレスマン}とらわれないという外観を呈している時でさえも、その実践はたえずエ

コノミーの理論に従っている」(二〇三頁)。人間の社会では、経済的財貨である「土地」が「売り買い」されるだけでなく、「復讐」といったものも「やりとり」(＝流通)されていることを見れば、それはわかることである。したがって、実践に関して「経済と非経済という二分法は放棄せざるをえない」(二〇三頁)ことになる。

「実践のエコノミー」とは？

では、「実践のエコノミー」と何かといえば、「物質的あるいは象徴的な利益の極大化^{マキシミゼーション}を追求する」(二〇三頁)ものにほかならない。ちなみにいえば、この場合の「エコノミー」は経済学用語でいう「経済性」に近い概念と理解してよいであろう(註1)。そこで追求されている利益(＝最大効果、最大収益)には、狭い意味での「経済」的利益だけでなく、「象徴」的利益も含まれているというのが、ブルデュー社会学の真骨頂といえよう。

さらに、ブルデューはこれに対応した資本の多様性にも触れている。「集団によって蓄積される資本は、…多

様な種類のもとに存在しうる（個々のケースをあげると、動員力に、したがって人数と戦意に結びつく戦力資本、同様に動員力に結びつく、土地・家畜・労働力といった『経済』資本、ほかの種類の本の規範に合った使用によつて保証される象徴資本）（傍点―安田。二〇三―四頁）。

そして、これら多様な資本は「厳密な等価法則」に従つており、したがつて「相互に転換可能」なものである。しかも、「それぞれの資本は特殊な条件の下でのみその固有な効果を發揮する」とされる。「象徴資本」の場合、「誤認され、承認される限りにおいて、『物質的な』資本」となるのである。たとえばそれは、こういうことであろう。「象徴資本」の一つである「信用」はそれが「信用」される限りにおいて、つまり「誤認され、承認される限りにおいて」のみ、お金かねという「物質的な」資本」となりうる（借りたり、貸したりできる）のである。つまり、「誤認と承認という認知行為が社会的現実の一部」を構成しているのであり、「認知行為」と

いう「主観性が客観性に属していること」を証明しているのである（二〇四頁）。

「象徴資本」が「政治的權威」を形成する

ついで、「政治的權威」が「象徴資本」の贈与（提供）によつて形成されることが明らかにされる。つまり、支配的な人間関係は、不平等な物や象徴の交換によつて生ずるのである。すなわち「贈与交換における様々な程度の対称性を経て、政治的權威を形成する基礎となる誇示的再配分の非対称性に至る」（二〇四頁）というのである。「誇示的再配分」とは、たとえば部族の「首長」による小作農民などに対する農産物などの恩恵的な供与のことである。「経済的状况の相対的平等を前提とする完全な互酬性から遠ざかるにつれて、感謝、敬意、尊敬、恩義（義理）、道徳的負い目（道義的重荷）が示すような典型的に象徴的な形態をとつて提供される對抗供与の部分」が必然的に増加する」（二〇四頁）。経済的に平等で、対等な交換から遠ざかり、不平等な交換になると、供与す

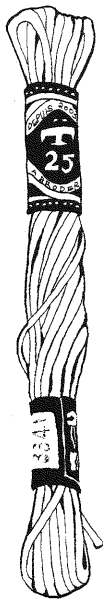
る側に「感謝、敬意、尊敬、尊義オブリガション（義理）」、道徳的負い目
〔道義的重荷、負担感〕といった「象徴資本」が蓄積さ
れることになる。つまり、恩恵的な贈与（Ⅱ「誇示的再
配分」）を与える側に、「政治的権威」が付与されるので
ある。こうして、「経済資本から象徴資本への転換」、つ
まり「経済に基礎をおきながら道徳的關係のペールに包
まれた依存關係」が生まれる（二〇四頁 註2）。ここ
でブルデューは、カピリアの貧農が体面をつくらうため
に経済的には不平等な、損を承知で結ばれる牛の預託契
約を事例にあげている（こうした事例は、ブルデューの
観察眼がいかに鋭いかを示している）。

しかも、こうした「象徴資本」は「否定（Vernichtung）」
（フロイト 註3）の形態をとることによってこそ、そ
の効果を發揮する。「人は『貧乏人に与えるために富み
栄えるのだ』』というのは、「利害関心の実践的否
定の模範的表現であり、この実践的否定はフロイ
トの否定のように、利害関心の充足を許すが、利
害関心を充足していているのではないのだという

ことを明示する（利害にとらわれないという）形態を
とつてのみおこなわれる」（二〇八頁）。だから、富む者
から貧しき者への贈り物は、「神から人間に与えられた
贈り物」だといわれるのである（二七二頁）。つまり、
恩恵的、慈善的行為は感謝されたいとか尊敬されたいと
かいった「利害関心」が隠されていてこそ、かえって感
謝されたり、尊敬されたりするに値するものとなる。こ
のように隠蔽されてこそ効果を發揮するのが、「象徴的
暴力」なのである（註4）。

「象徴的暴力」と「公然たる暴力」

したがって、社会において人を支配する方法には、①
「公然たる暴力」と②「象徴的暴力」の二つがあること
になる。つまり、「高利貸しが強制する公然たる経済的



債務」のような「公然たる暴力」と、「気前のいい贈与
が作り出し維持する道徳的負い目や情緒的愛着」、「検閲
され婉曲化された」、すなわち誤認され承認された暴力」
である「象徴的暴力」の二つである（二〇八頁）。日本
語で「暴力」というと直ぐに物理的暴力が連想されてし
まうが、この場合の「暴力」は「強制力」つまり人に何か
を強いる外部の力の意味である。

さて、この二つの支配形態は、どのような関係にある
のだろうか。まず、「象徴的暴力」の特質は、①直接的
な人格的支配であること、つまり「支配が人から人へと
いう要素的形態をとつてのみおこなわれる」こと、②否
定された形態、つまり「この支配は公然とは実行され得
ないのであり、魔術をかけられた関係のベールの下に隠
されねばならない」ことにある（二〇九頁）。

さらにこの二つの暴力は、①「共存」しているとしても
に、②支配者と被支配者との「力関係」によって、異
なった比重において行使される。つまり「物理的であれ
経済的であれ公然たる暴力と、最も洗練された象徴的暴

力とのこのような共存は、この経済を特徴づけるあらゆる
の制度の中に見られるし、それぞれの社会関係の中にさ
え見られる」（二〇九頁）。また、「公然たる暴力とソフ
トで眼に見えない暴力とのどちらを『選ぶ』かは、両当
事者間の力関係の状態にかかってくる」（二一〇頁）。だ
から、支配者の公然たる暴力」が被支配者によって反撃
され、しかも社会的な承認が得られない場合は、「象徴
的暴力」によってその支配は補完され、補強されねばな
らないのである。たとえばカヒリアの地主は、自分の分
益小作に対する支配を、「物理的暴力と象徴的暴力を組
み合わせたり交互に使ったりすることで、はじめて維持
することができた」のである（二一〇頁）。ここでいっ
ている「象徴的暴力」とは、「ソフトで眼に見えない、
暴力としては否定される…暴力であつて、信頼、負い
目、人格的忠誠、欲待、贈与、感謝、憐憫、畏敬といっ
た暴力であり、一言でいえば名誉の道徳が讃えるあらゆる
美徳の暴力〔徳の力〕である」（二一〇頁）。

したがって、「象徴的暴力」による支配とは、いわば

人徳による支配なのである。しかし、人徳は一朝一夕に得られるものではなく、それを獲得するには「たえざる気配り」、多大の「労苦」、「多大の投資」、貴重な「時間」(二二二頁)を費やす必要がある。さらに、「個人的人格の權威」は「集団の価値」や「公的な規範」を尊重し、遵守することによってのみ維持できるのであり、村の「実力者」はこうした価値や規範に人一倍気を使わねばならないのである(二二四頁)。

支配は「制度化」によって

不透明になるが、安定する

「前資本主義」的経済の場合、「経済資本であれ文化資本であれ資本蓄積の制度的条件が与えられていないので(…)、どんな社会構成体にも見られる象徴資本の蓄積に志向する戦略が、最も合理的なものとなる」。つまり、アルカイックな社会では「人徳」による支配が最も理にかなったものとして大きな比重を占めることになる。しかし、前述したようにこうした「象徴資本」に専らものと

づいた支配の形態は、属人的であるが故に不安定である。これに対して「制度化」による支配の場合、人による直接的な支配ではなく、市場、教育、法といった「客観的、制度的メカニズム」によって媒介されているので「不透明」なものとなるが、それだけに安定的な支配が保証される。この「制度化」は、「資本の客体化」(資本の属人性の否定)によって確立される。つまり「制度化」は、「自動調整的市場(K・ポランニー)」、「教育制度」、「法的装置」によって遂行される(二二五―六頁)。「制度の中に客体化することは、物的あるいは象徴的な獲得物の永続性と累積性を保証する」ことになる。つまり「制度化」によって、こうした物的・象徴的資本をその都度人の手によって創り出す手間が省かれ、それらは累積され、継承されるようになる。さらに、こうした「制度化」が保証する物的・象徴的利益は、「差異を生み出す領有対象」(傍点Ⅱ安田)であるが故に、資本の「制度的客体化は資本の分配構造と…支配・従属関係の再生産を保証する」ことになる(二四六頁)。すなわち、

「制度化」は階級関係の維持に貢献するのである。しかも、「制度化」のおかげで「物的・象徴的利益を領有する〔自分のものにする〕手段を持つている者は、あからさまで直接的な人格の支配を節約することができ」る。つまり、諸制度が確立されると階級の支配は「人と人の持続的な依存関係」を絶えず創り出さなくとも行えるようになるのである(二一六―七頁)。たとえば、そのおかげで支配者は不用意なことをいったために、不興を買ってその支配を危うくするといったリスクを減らせるのである。

法と教育による「象徴資本」の「制度化」

アルカイックな経済(「前資本主義」経済)の場合、「物的富」は専ら「顕示(パスカルが「誇示」モントルとよぶもの)による権力の示威行動の手段」であった。ジョルジュ・デュビイーによれば、封建社会における「象徴資本」を獲得するための「経済資本」の誇示的浪費は、「経済資本」の蓄積を妨げる役割を果たしたのである。

しかし、「完全な制度化だけが、全く『誇示』を省略できると言うわけではないが、…少なくとも『誇示』に全面的に頼らないで済ませることができるようさせる」のである(二一七―八頁)。つまり、特定の人格に身体化された「職務と職務の間」の関係の代わりに、「制度化は厳密に確立され、法的に保証された、承認された地位と地位の間の関係を打ち立てる」のである(二一八頁)。

こうして、地位と地位の関係は人格と人格の間から分離され独立した関係、つまり自立した関係となる。

「地位」を占める者は、「資格」クワイテによって「定義され、その資格は貴族の称号、所有権証書、卒業証書のように、人々がある地位を占めることを認可する」(二一八頁)。こうして、「順位(ランク)」や「序列(オーダー)」のレベルを決定する「資格」は、「財(不動産、威信、任務、特権)」の序列と「等価関係」をなし、「財への接近と排他的所有」における序列を決定し、「行為者間の関係を持続的に」確立するのである(二一八頁)。さらに、このように制度化された「資格」は階級関係を

形成することになる。この「資格」を作り出すのが「教育制度」にはかならない。

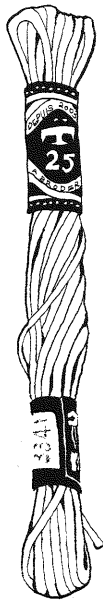
すなわち、教育制度は同じ資格（卒業証書）をもつすべての者たちに同じ価値を与え、人々を置き換え可能な存在にする。さらに、「学校制度は資格保持者のすべてを同じ基準に結びつけ、すべての文化的能力の統一市場を創りだし、特定量の時間と労働によって獲得された文化資本の貨幣の転換可能性を保証する」のである（二一九頁）。それとともに「法は、…集団間と階級間の力関係の（一定の）状態を専ら象徴的に承認させる」役割を果たしている。教育制度は、資格と職種の関係（結びつき）を保証し、職種間の階級関係を決定する。つまり、法制度と教育制度は「文化資本」の配分によって階級間の力関係を形成し、再生産し、「正当化」するという「イデオロギー的機能」をもつことになるのである（二二〇頁）。

社会科学は、

「客観」の中に「主観」を発見する

さて、最終章に移ることにしよう。本章は「序言」と「第一章」に対応しており、主観主義と客観主義の対立を止揚するという視点から、「主観的なるもの」が客体の一部を構成していることが明らかにされる。

「既成秩序、およびその基盤をなしている資本の分配」、つまり階級構造は、それが誤認されていることから生ずる「象徴効果」によって「自分自身の存続に貢献」している（二二二頁）。客観的に見て経済的、文化的不平等が存在しているというだけでなく、主観的にこうした不平等が正当化され、つまり「誤認」されることによってこの不平等は維持されうるということである。



すなわち、社会科学は「客観的」認識を獲得するためには「破壊しなければならなかった対象の一次的表象を、対象の完全な定義の中に導入しなおさなければならない」(二二二頁)のである。ここでいっている「一次的表象」とは、主観的認識のことであり、「誤認」や「承認」といった認知行為の所産のことである。つまり社会科学が、とりわけ「客観主義」的な社会科学がその科学性を保証するものとして排除した「主観的認識」を、取り戻す必要があるとされているわけである。そうすれば、「個人や集団は、それが何であるかによってばかりでなく、何と見なされているかによって、つまり存在に厳密に依拠しているものの、決して全面的にはその存在に還元できない知覚される存在 (être perçu) に よっても客観的に規定されている」ことがわかるのである。したがって、「社会科学は、個人や集団に客観的に付随している二種類の属性」すなわち「身体をはじめとして、物理的世界のどんなものとも同じで、数え上げ測定できる物質的属性」と「差異を表わす属性として評価

され、…物質〔素材〕の属性である象徴的な属性」を「考慮に入れねばならないのである」(二二三―二三頁)。

主観的なものは、客体に付随する「象徴的な属性」であり、行為者によって主観的に評価される客観的な存在なのであり、社会科学はこの両面をつねに問題にしなければならない。

客観的な「社会的秩序」を形成する上で、とくに重要な認知行為は「分類すること」と「分類される」という相互行為である。この相互行為によって、階級構造の「象徴的な属性」が形成され、支配の「物質的な属性」(経済的・物理的支配)は補完され強化されるのである。

「客観主義」の限界

しかし、客観主義にはこれが分らないのであり、それは「力関係という階級間の関係の『客観的』真理」を認識すると、もう一つの客観的真理である「支配に正当性 (legitimie) の外観を与える…象徴的関係のベール、のあることを取り逃がしてしまうのである。つま

り、客観主義は「搾取関係という『客観的』真理」を認識することで満足してしまつて、「階級関係の真理を見まちがう誤認が、階級関係の真理の構成要素をなしていること」を忘れてしまふのである（二二四頁）。

身体化された分類図式であり、認知と評価のシステムであるハビトゥスは、「恣意的な差異」を「正当なものとして承認」し、この差異を「差異を表わす記号」として認知、評価する。その結果、その「差異の希少性が高ければ高いほど」この差異は「大きな卓越化の金利を保証する象徴資本として機能する」（二二四～二五頁）。つまり、外部の人間から見れば取るに足らない違いも他人には手が出せないものとなれば、他人に差をつける手段（＝象徴資本）として役立てることができるといふのである。こうして階級闘争は、搾取する者と搾取される者との闘争ではなく、希少と認知された僅かな「差異」を巡つて行われる分類闘争にすり替えられることになる。

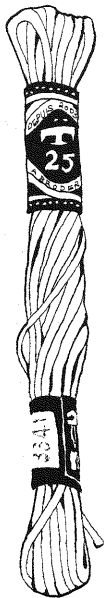
「その階級や集団がもっている象徴資本や肩書

きを」とりわけインフレーション（価値減価）から守ろうとする時、直近の上位集団と肩を並べようとしたり、一体化しようとしたりするために（…）、あるいは直近の下位集団に差をつけようとして「卓越化を狙つて」絶えず闘争する以外に道はないのである（二二五頁）。

つまり、「知覚された差異は客観的な差異ではなく、直近の差異の場である社会的近接関係が、より大きな緊張点でもある可能性はいくらでもあるのだ」（二二六頁）。

「階級闘争」の「分類闘争」への矮小化

要するに、階級構造において近い位置にいる者どうしは、自分たちの存在をお互いに脅かす可能性があるの
で、強い緊張をはらんだ関係になることがあるといふの



である。いわゆる「近親憎悪」である。したがって、「客観的な最小距離は、主観的な最大距離と一致するところがある」のだ(二二七頁)。そうした者たちにとって「微分的差異」は、「ごく僅かな差異(「微分的差異」) Ⅱ「無限小の差異」)も気になって気になって仕方ないほどに大きく見えるのであり、「全てか無かの絶対的な差異」に変質してしまうのである(二二七頁)。こうした「象徴効果」によって、諸階級や諸集団は、分断され細分されることになる。したがって「種差、直近の差異を巡る闘争は、共有する類的特性、『客観的』連帯、階級を隠蔽する」(二二七頁)(註5)。その現実的な帰結は、「ライバルとの闘争は、その狙いが階級分けクラスマンを廃止したり、階級分けの原理を変更したりすることにあるのではなく、階級内の位置を変えることにあり、またそれゆえに、この闘争には階級分けの暗黙の承認が含まれているのである。さらに、この闘争は近親者、近接者、似た者どうしを分断(分割、分裂させ)し、他の階級に対する闘争―その中で階級は形成されるのだが―の最も完璧なるアンチ

テーゼ、最も見事エフィカスな否定となるのである」(二二七頁)。こうして「階級闘争」は「微分的差異」を巡る「分類闘争」に変質する。ここから「生活スタイル」(ウェーバー)の階級性や衣服、住居など「消費」の階層性が生まれるのである。

このような「象徴闘争」が直近の者に対して「境界線を引く傾向をもち、部分革命レボリューション、バルシエルしか行わないとすれば、それは、この象徴闘争の限界が貴族の称号や学校の資格のごときカリスマの証明や聖別化の指標の制度化にあるからでもある」(二二七頁)。すなわち「象徴闘争」は、その闘争目標を自分の偉さは天与のものだと思わせたり、自分を特別視(聖別化)させたりすることに矮小化するのである。だから、「支配階級」である「ステイタス集団」は、自らの社会構造における稀有な地位に伴う「卓越化の効果を象徴的に一層強めることによって、事実としての差異を永続的な、準自然的な(Ⅱ生まれながらで、自然なものにする)」、したがって正当なものにしようとするのである」。このような「卓越化」(Ⅱ他人

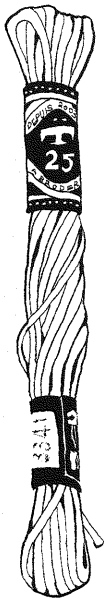
に差をつける」の制度化された戦略」が、支配階級の自己意識なのである（二二八頁）。

認知行為による「変革」の可能性

こうして「象徴闘争」は、既成の分類の仕方を変更することによって、経済資本と文化資本の「分配の仕方」を転覆することに利益をもっている者たちと、世界が押しつけてくるカテゴリー（分類）を世界に適用し、社会的世界を自然的世界として把握する疎外された意識としての誤認を永続化することに利益をもつ者たちとの間で行われる」（二三三頁）。ここでいう「誤認とは、自分が承認しているものを自分が生産していることを知らず、自らの対象、自らのカリスマの最も内在的な魅力をなすものが、信用操作の、またそれによって行為者たちがその対象に自らが従っている権力を与える無数の信用操作の所産でしかないという事実を知ろうとしない物（象化された）——認識である」（二三三頁）。被支配者は、「誤認」や「承認」によって自分が

作りだす権力によって支配されているのであり、「カリスマ」を崇めるといった「信用」を付与する行為によって権力を象徴的に作りだしているのだ。だがここから逆に、一時的な均衡にすぎない社会的状態を「転覆」したり変革したりする戦略や可能性も生まれてくる。「転覆行為に固有な有効性は、個人的・集団的実践の方向付けに貢献している思考のカテゴリーを、また特に、分配の認知と評価のカテゴリーを意識化することによって変える能力にある」（傍点安田。一三三—三三頁）。

最後にブルデューは、社会科学の任務を次のように宣言してこの理論編を終わらせている。つまり「現実を保守すること、あるいは変革すること（トランスフォーメーション）をめぐり、その賭け金が現実の正当的な定義の押しつけであり、その固有な象徴的な有効性



が既成秩序の保守や転覆に貢献しうるような闘争を含んでいる現実、これが社会科学の対象である」(二三四頁)。すなわち、「象徴闘争」をも含む「階級闘争」の現実を社会科学は解明しなければならぬのである(註6)。

——終——

(上越教育大学)

註

1 「経済性 (economical efficiency) は、「最小の犠牲による最大果の達成、最小費用による最大収益の獲得」と定義されている。大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典・第二版』、岩波書店、一九八九年、三〇〇頁。

2 さらに、ブルデューはこの箇所の注(二七〇頁)でマルクスのいわゆる「世界史の三段階説」Ⅱ「依存関係史論」にふれている。つまり、マルクスは「前資本主義社会」においては「人格的な依存関係」が、資本主義社会では「物的・依存的・の上に築かれた人格的独立性」が優位であるとしている。

3 フロイトの精神分析における概念である「否定 (Verneinung)」は、「抑圧された思考内容」の「知的代理」としての「否定」である。子どもが「そんなものいらない」と強く「否定」すれば、逆にそれをいかに欲しているかを物語っていることになる。詳しくは、R・シエマ編『精神分析事典』(弘文堂、一九九五年)二九二～三頁、およびラプランシュ、他『精神分析用語辞典』(みすず書房、一九七七年)三九六～八頁を参照されたい。

4 第四回連載でのべたように、ブルデューは「おおい隠されたものについてしか科学は成り立たない」つまり科学の任務は「隠されたもの」を明らかにすることであると主張している(本誌二〇〇三年一月号、四五頁)。

5 ここである「種」は「類」と対比される分類概念であり、「類」は「種」の上位概念、つまり「類」は「種」を含んでいる。

6 ブルデュー社会学の方法論的特質や政治参加の一端については、拙著『ブルデュー社会学を読む』(青木書店、一九九八年)を参照されたい。

夏、それぞれの成長

— 幼いきょうだいと暮らす —

藤津 麻里

昨年の夏は一か月、夫の実家に滞在しました。

山口県の長門市という、日本海に面した小さな町です。旅をするとは成長するといいますが、確かに我が家の子どもたちも、体も心もぐーんと大きくなった一か月であったように思います。

とりわけ印象的だったのは、次男の激しい人見知りでした。七か月ぶりに会う祖父母に、三歳二

か月の長男は、すぐになじんだのですが、一歳三

か月の次男は全くダメ。少し前から、知らない人に会うと時々泣くことはありましたが、この時は住む家や生活全体が変化したショックもあったせいか、殊に激しく人見知りが出たようです。

祖父母と目が合うとうつぶむいて上目遣いに睨むようにして半ベソ。コチコチに固まってしまいま

す。祖母はそれを見て「おでこで人を見ている」と大笑い。もう一度目が合おうものなら、アーンと泣きだしてしまいます。おかげで、夕食のテーブルについても、祖母は次男と目が合わないように気をつけながら食事するはめになりました。

この子はもともと陽気でニコニコしている子で、スーパールのレジのおばさんにも笑顔をふりまわし、行動も大胆な方だ、と私は思っていました。この激しい人見知りはずっと意外でした。祖母も寂しいだろうし、少し困りましたが、そのうち変わるだろう……と気楽に考えていました。

変化の兆しが見えたのは、二、三日後でした。訪問した大叔母に「おいで」と誘われ、トコトコ近づいて一瞬タッコされ、パツとすぐ離れたのです。そばにいた私も夫もびっくり。大叔母の笑顔



に、何かひかれるものがあつたのでしょうか。あるいは、新しい環境に慣れてきてリラクセスし始めたしるしだったのでしょうか。後で話を聞いた祖母は「まあ、私にはまだ抱かれんほに（抱かれないのに）……」と少し不満そう。

やっと祖母に慣れてきた、と思えたのは一週間経ってからでした。祖母がおどけて遊んでくれると少し笑うようになり、自分でも椅子の陰に隠れては出てきて、顔を隠していないならばあをしてみせます。それでも、まだ完全に人見知りがなくなったわけではなく、祖母から顔をそむけることも時々みられました。

こうしたゆっくりとした過程を経て、最後は

すっかり祖父母になつきました。特に祖父が好きで、「パパ」と呼びかけるので「おじいちゃんだよ」と教えると、「オジーチャン」というような発音をします。夕食を食べていても、祖父が帰宅した物音に「おじいちゃんが帰ってきた!」とばかりにパツと立ち上がり、玄関に行つて祖父の足に抱きついて歓迎していました。

この人見知りは、次男にとつては成長の山を一つ越えるような出来事だったのかもしれませんが。普通は父、母、兄とだけ過ごしているのに、急に祖父母や親戚が賑やかに出入りする家に移り、新しい環境に慣れるのは、彼にとつては大変だったことでしょう。その困難な時を乗り越え、新しくより豊かな人間関係を築くことができたのだと思うのです。

年の近い従姉妹たちとの関わりを持たせたことも、子どもたちには嬉しいことでした。次男も、

相手が子どもなら人見知りもせず、すぐにニコニコ一緒に遊び始めます。七歳と四歳の従姉たちが来た時は、はしゃいで後について家じゅうをのし歩いて大喜び。少し年下の、一歳になったばかりの双子の従妹に対しても興味津々です。おもちゃをパツと取られてしまい、泣く一幕も。その後何度か取り合いになり、自分が取つて従妹が泣くと、顔を覗きこんでおもちゃを渡そうとしたり、それを従妹が取ろうとすると渡さず、取り返そうとしたり……。相手が泣くと可哀相だけど、自分もおもちゃを使いたい、という心の揺れが見えるようでした。

長男も、従姉たちと公園やサファリパークに行つたり、畑でバッタをつかまえたりして過ごし、双子の従妹にはやさしく遊んであげ、面倒をみようとしていました。自分の弟に対しては怒ったりひどい態度をとることが多いのに、よその小

さい子にはやさしいんだな、と見ていておかしくなるくらいでした。

実は、長男の次男に対する態度には、このころずつと困っていたのです。弟に遊びを邪魔されたり、作ったものを壊された時に、悲鳴をあげたり、怒って手が出てしまう……。これは、見ても気持ちが悪く理解できるのですが、弟が手にしたおもちゃは何でもすぐとりあげる。弟が何もしないなくても「ダメ！ダメ！」と叫び続ける、となつてくると、こちらもどう対処していいのかわからず、長男を叱ってばかりの毎日が続いていました。弟のおもちゃを意地悪でとりあげるのではなく、弟が手に取ったとたん、それが欲しくなつてしまうようなのです。おかげで次男は泣かされっぱなし。長男の方も次男がすることに気をとられすぎて、自分の遊びにじっくり没頭できずにいるのではないかと思わされるほどでした。

その一方で、弟と同じような声を出してみたり、同じ甘え方をしてみたりもします。そ

うすれば、親に可愛がってもらえると思うのか……。私達も、つい小さい次男の方に目が行きがちで、長男の気持ちを充分受けとめたり、ゆつくり甘えさせたりすることが少なくなっていたかもしれませぬ。

家に戻ってきて二週間経って、もとの生活のペースが戻ってきたようです。そして、長男の次男への態度に、少しゆとりが出てきたのを感じます。以前は何かあるとすぐに「ともちゃん（次男）はダメ！ダメ！」と叫んでいたのに、このごろは遊びを邪魔されても、すぐに怒ってばかりいるのではなく、「ダメだよー、ともちゃん。アハハハ」なんて言えるようになってきたのです。



もちろん、いつもそうだというわけではないのですが……。

弟にやさしくなったことをほめてやると、「なおくん（自分のこと）、おこることもあるからねー」と長男。「なおくん、おこるとかいじゅうになっちゃうの。でも、ともちゃんが『ごめんね』つていえば、なおくんわかるよ」これには、「ともちゃんは『ごめんね』つて言えないから、ママがかわりに言うね」と答えておきました。それにしても、自分の感情をこんなふうに客観的に言葉で説明できるようになるなんて、ずいぶん成長したなあと感じました。

何が原因でこんな変化が起きたのか、よくわからないのですが、もしかしたら、祖父母の家で小さな従妹たちにやさしくする場面ができたことが、いい方向に働いたのかもしれないね、と夫が話しています。いろいろな人の関わりに支えら

れながら、じつくりと心も成長してゆけるのですね。

言葉がどんどん出てきて、ますますおしゃべりになり、元氣いっぱいの子男。背が伸び、床屋で髪を短く切ったらグッと男っぽく、カッコよくなった長男。「もう三さいだからね」と自分に誇りをもち、今できないことも「五さいくらいになつたらできるかなー」なんて言っています。私も、二人の接し方にもっと心を砕きながら、親として、強く、かしく成長していければ……と願っています。

(会津若松市在住)

編集後記

倉橋惣三は、「春の自然は子どもの仲よし」の中で次のように書いています。

*

自然は子どもの友達です。わけても春の自然はやさしい友達です。始終にこやかにほほえんでいます。柔和に話しかけます。いつも明るく、さあ歌いましょう、踊りましょうとさそいます。…すべての子どもを自然と親ませ伸よしにならせたいためです。そのためには、わたくしたちも、自然を教え得る科学者であり、自然を愛させ得る詩人でなければなりません。〔子どもの心とまなざしで〕フレールベル館

*

今月号の「森の幼稚園」…」の園の研究紀要を見ると、入園したての五歳児Aが森で過ごすうちに友達と遊べるようになっていった様子が書かれていました。

そのきっかけは、森で不安に立ちつくすAと先生のやりとりでした。

Aが落ちていたおもちゃの鉄砲玉を見つけ「ほら」と見せると、先生も「私はこんなの見つけたよ」とサクランボを見せました。それからサクランボ拾いが始まり、そしてその実をつぶしてジュースも作りました。

六月になり森の実がサクランボからユリカリに変わる頃になると、Aはユリカリの実の殻を自分の指にはめ「髪の毛みたいでしょ」と周りの先生や友達に見せるほどに、森にも友達にもなじんでいました。(仲)

幼児の教育

第一〇二巻 第五号

(二〇〇三年五月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年五月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二

発売所 株式会社 フレールベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレールベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実践シリーズです

乳幼児を迎える保育室の環境
づくりのヒントが満載！



0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実践シリーズ 1
笑顔がいっぱい
わくわく保育室

- ・乳幼児のためのかわいい誕生表、保育室を明るくする壁面飾りのアイデアを数多く紹介しました。
- ・保育室をすてきな空間に変える生活環境便利グッズの数々には、牛乳パックで作る「みんなの帽子入れ」、キルティング布を使った「遊べるおむつ替えマット」、段ボールと布の「どこでもまど」など、身近な素材で簡単に作れるものばかりです。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円＋税

0・1・2歳児が喜ぶ、手づくり
おもちゃ・プレゼントのアイ
デアがいっぱい！



0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実践シリーズ 2
げんきわくわく
手づくりおもちゃ・プレゼント

- ・感触のよさやなめても安全なもの、洗濯のできるものなど、乳幼児のおもちゃが備えなければならない特色と“手づくりのよさ”を生かしたおもちゃ・プレゼント・誕生カードのアイデアを多数紹介しました。
- ・おもちゃを手づくりするには、時間も手間もエネルギーも必要ですが、工夫する楽しみ、完成の喜び、子どもたちが手にして喜んでくれる姿を見るとき満足感、それらに費やした苦勞を吹き飛ばしてくれます。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

子育て支援と

柏女霊峰 著

(淑徳大学社会学部教授)

保育者の役割



子育て支援に対する保育所・保育者の役割がこれまでになく強調されるなかで、保育所・保育者はどのような子育て支援ができるのか、あるいはすべきなのか。この本では、子育ての現状を踏まえ、保育所・保育者が取り組む子育て支援の意義と具体的活動のあり方について、さらに保育士資格の法定化を踏まえた「保育指導」のあり方や課題について考えます。

●保育士資格の法定化によって子育て支援のあり方を学ぶことが努力義務となります。また現場での手引書として、また保育士を目指す学生に必須となった「家族援助論」の教科書としても活用ください。

目次

- 第1章 子育ての現状と子育て支援の必要性
- 第2章 子育てニーズと支援の方法
- 第3章 保育所の課題と子育て支援
- 第4章 保育所における子育て支援
- 第5章 保育士資格の法定化と子育て支援
- 第6章 保育所における子育て支援の役割と機能

A5判 176頁 定価：本体1,400円+税

キンダーブックの
フレール館